

コメントおよび質疑応答

花崎育代，日比嘉高（コメント）

中川 大岡昇平研究を専門とされる花崎育代さんにコメントをお願いいたします。大岡は戦時下、一兵卒としてフィリピン、いわゆる「南方」に持っていかれるのですが、その不条理で、理不尽な空間を生きることによって文学への道を確認しました。そうしたことを踏まえて、今回、花崎さんにコメントをお願いしました。

花崎 お二人のお話を聞いておまして、劉さんのお話の中で、観念や理念の中だけで考えていたものと現実との齟齬や違いから発見していくものとか、菅さんのお話の、侵略者でありながら被侵略者を“なつかしむ”，少なくともそれを想起していくことの困難ということ、——これから大岡昇平のことをお話するわけですが——、そのあたりのところで同じような問題を考えていける話ではないかと考えました。

大岡昇平『俘虜記』の「捉まるまで」の部分、「ミンドロ島ふたたび」のほんの少しの部分、さわりのようなものですが、それらを読みながら考えてみたいと思います。

大岡昇平は一兵卒でフィリピンに行っております。一兵卒の視点からみているということになります。今回、私に与えられたテーマは、強制的に日本を出ざるを得なかった大岡昇平の問題から、一挙に日本を出ていった作家に共通の問題を論じるということではなく、また、日本を出た兵士体験のある作家一般の問題をダイレクトに「帝国の孤児」というテーマに結びつけよというものでもないと思っております。すなわち当然ながら、日本を強制的に出ざるを得なかったものが、すべて大岡昇平になるわけではもちろんありません。あるいはそのような体験をもつ兵士が、すべて大岡昇平のような作品を記すわけでもないわけです。私のコメントは日本を強制的に出ざるを得なかった兵士一般の話ではありませんで、大岡昇平が書き、語った問題という個別具体的なこと、あるいは個別具体的なところから共有しうるようなところにひらいていければ、と、そのようなものになることを、はじめに申しておきたい存じます。

大岡昇平は第二次世界大戦末期の昭和19年夏、一兵卒としてフィリピンに出征しております。ミンドロ島サンホセの警備にあたりました。（一元号で区切っていく示し方は戦中戦後を通じて用いられているわけで、このことを無化することはできないと考えておりますので、あえてこの表記をとらせていただいています。—）

サンホセに行くわけですが、12月、米軍に駐屯地を襲撃され山中に退避します。露營生活に入るわけですが、衛生兵がキニーネというマラリアの特効薬を遺棄してきてしまったため、一挙にマラリアが蔓延して、マラリアで発熱中の昭和21年1月24日に露营地も米軍に襲撃されます。一人で彷徨していたところ、1月25日、昏倒中を米軍に捉えられ俘虜になるという経緯を辿っています。このあたりのことは、露营地襲撃の一昼夜、米兵を認めながら射撃しなかった

ことの省察を中心にした「捉まるまで」（原題「俘虜記」、初出は『文学界』昭和23年2月号）という作品にはじまる『俘虜記』のなかで、「大岡」と呼ばれる「私」の一人称のかたちで詳しく記されています。もっとも、「大岡」と呼ばれる「私」、あるいは大岡が一人で過ごした一昼夜の出来事や思念がホントかウソか、ということは誰にも検証できませんし、またそういった観点からこの言説をみても、あまり意味のあることではないでしょう。またそうしたことを戦場の力学のような問題から考えることも、少なくとも国際関係や政治学の専門家ではない私には不可能な問題だと存じます。

「文学」を勉強する私が可能なのは、事後、こうした自分しか知り得ないことでありながら、それを追究し発表していったこと、戦地に赴き、生き残り、俘虜になり、帰還した、そうしたことを考え書き続けた、そのことを読みながら考えていくことしかないと考えております。

そこで『俘虜記』ですが、「捉まるまで」で大岡は「私」に、戦地に赴く心境を次のように語らせていました。

私は既に日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦に引ずりこんだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかった以上、今更彼等によって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くこうした考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を嘔わないためにも、そう考える必要があったのである。／しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具の様な連絡船の赤や青の灯を見て、奴隷の様に死に向かって積み出されて行く自分の惨めさが吐にこたえた。／出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」という観念に安住し、時局便乗の虚言者も空しく談ずる敗戦主義者も一筋^{から}げに嘔っていたが、いざ輸送船に乗ってしまうと、単なる「死」がどっかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

（引用は筑摩書房刊、平6・10～平15・8、『大岡昇平全集』全23巻別巻1に拠る。／は原文改行。以下同。）

「私」は「一介の市民」と「一国の組織」を対等に論じる考え方を「滑稽」と感じます。

そして「軍部を憎んでいた」が「阻止」するための何事も行わなかったゆえに、「抗議」する権利を持たない、だから戦場に赴くのだと考え、死ぬべく戦地に赴くという「無意味」を自分に納得させようとしつつも、「輸送船」の実際は「死」をしか意識させません。

続く部分では「死の観念」が「生活のあらゆる瞬間」に「私」を襲うことが述べられてゆき、「死とは何者でもない、ただ確実な死を控えて今私が生きている、それが問題なのだということを了解」せざるを得なくなります。

しかし、先に述べた、米軍襲撃を受けて、山中に退避して後も、また「死」がどっかり前にあると考えながらも、“無意味な死”を“意味のある死”と思おうとしていたことが、すなわち、自分の死は無意味ではないと考えようとしていたことが、みてとれます。それは、「私」が、「周囲で僚友が次々に死んで行く」なかで、同じ部隊の「S」という男が、「こんな戦場で死んじゃつまらない」と言ったのを「天啓」だと感得したところからも明らかです。「この死を無理

に自ら選んだ死とする」ことを傲慢なこと—「倨傲」—であり「自己欺瞞」であるとし、「こんな辺鄙な山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になって死ぬのは、単に「つまらない」、ただそれだけ」だといえます。

ただ、『俘虜記』においては、戦場の実際は、こうした自己の死のみを考える思念にとどまることをゆるしません。すなわち大岡の『俘虜記』は、敵兵を前にしたとき、“戦場”が、または“戦場の死”が、自分だけの思念で自分を納得させられるものではないことを痛烈に指し示していくこととなります。

次に示すのは、「捉まるまで」の、部隊から離れてひとりであった「私」が、敵兵を自分だけが認めた状況において、なぜ射たなかったかを省察する、よく知られている場面です。

戦争とは集団をもってする暴力行為であり、各人の行為は集団の意識によって制約乃至鼓舞される。もしこの時僚友が一人でも隣にいたら、私は私自身の生命の如何に拘らず、猶予なく射っていたろう。

しかし「私」は射ちませんでした。

とまれかくして米兵は私を認めずに去り、私はこの青年を「助けた」という「美行」の陶醉と共に残された。もっともこの陶醉には苦い味がなかったわけではない。即ち私はすぐ私の逸した兵士が陣地正面の戦闘に加わり、それだけ僚友の負担を増したことに気がついたからである。／この反省は辛かった。しかし米軍がかくも優勢である以上、僚友はいずれ死なねばならぬ。そして私も永く生きてはいないであろう。この考えが依然として私の万能の口実であった。（傍点原文）

「私」なる人物として描かれた人物はその後、昏倒中を米軍に捉えられ、俘虜となり生還し、戦後にこうした文章を綴っており、「私も永く生きてはいないであろう」という「万能の口実」はすでに成立し得ません。そうした戦後という事後、大岡においてアジア—フィリピンで俘虜になるまで、—“捉まるまで”—、においては成立していた「万能の口実」が潰えたとき、「戦場」の“生き死に”は、もはや「私」だけでなく「敵」「僚友」といった「集団をもってする暴力行為」という、先に掲げた「私」による定義を強く認識させるかたちで、大岡に迫ったと言えます。

当然のことながら、敵兵を「助けた」とは、戦場においては「美行」ではなく、僚友の負担を増してしまう、「悪」になってしまうわけです。

—磯田光一はかつて、「敵を殺さないことが味方を殺すことを意味し、また戦後まで生きのびてしまったことがそのまま“罪”を形づくってしまうような、いわば“地獄”の体験」（磯田光一『「悪霊」のかなたのムイシュキン—大岡昇平氏と戦争体験』、『大岡昇平全集 月報9』（昭49・7,中央公論社）と述べましたが—、大岡は少なくとも『俘虜記』を書くことによって、戦場において「ヒューマニズム」なる観念が無効とならざるを得ないことを痛切に確認せざるを得なかった、と言えましょう。

さらにいえばそうした出来合いの観念の無効性を、大岡はやはり『俘虜記』を書くことで確認し得ています。この若い米兵を射たなかった理由は、省察ののちも確定はできないながら、

ヒューマニズムでも人類愛でもない、と言い切っていることです。自分がその兵士の薔薇色の頬を見た、一はっきりは覚えていないながら「アメリカの母親に感謝されてもいい」という感想を抱いたところから推し測りつつ、その個別具体的なところをこそ重視しているこうした大岡の、あるいはこの作品の思考方法は、きわめて注目すべきことであると考えます。

人類愛から発して射たないと決意したことを私は信じない。しかし私がこの若い兵士を見て、私の個人的理由によって彼を愛したために、射ちたくないと感じたことはこれを信じる。(傍点原文)

なお、この思考方法は、『俘虜記』において、俘虜の同胞を観察するまなざしにも表れていきます。詳しく述べることは控えますが、例えば『俘虜記』「戦友」の章(初出『文学界』昭和24年3月号)で、「私」による批判的文言として書かれている、佐藤伍長の発言に対する「出来合いの観念を表現しているに過ぎない」や、亘に対する「思想の抜け殻」・「あまり頭を労していない」といった考え方です。

ところで、大岡が兵士として戦い、俘虜となったフィリピンは大岡の言葉にあるとおり「他人の土地」でした。

戦後二十数年後、『レイテ戦記』執筆のための取材にあわせ、たちよった大岡の戦場＝ミンドロ島での「今日」を描いた「ミンドロ島ふたび」(初出は『海』昭和44年8月号)は、その「他人の土地」であること、そしてそこを戦場にしたことを痛感させます。「私」はかつて所属部隊が駐屯していた兵舎の建物を見ます。しかしそれは俘虜になった直後に通過したときと同様の「そっけなさ」をしか「私」に見せません。

もとの兵舎が見えて来た。(中略)なんとなくそっけない様子に見えた。(四)

建物がこの前見た時と同じく、そっけない様子をしているのは、私の心に悲しみを残した。(同)

さまざまな過去を想起しつつ、しかし自分と僚友との間の問題でさえ、「私」には「涙と情念」の「解放」(四)は訪れません。

さらに痛烈なのは、フィリピンの住人とのやりとりです。ミンドロ再訪の終わりに近く、「サンホセの町をひと廻り」と、PC(フィリピン国家警察)の忠告を振り切り、同行の二人と、渋い顔の軍曹とともに市場に入っていきます。

人々の眼付きはそれほど悪意を持っているとは思われない。I君がスモモを買った。カキ氷を売っている。その機械も日本製で、昔なつかしい「氷」という字を見た。(六)

「なつかしい」ということばの中には、フィリピンに赴いた人間においての、単に日本の内

地と外地という二分して済む問題ではなく、その土地で駐屯している間に現地の住人とのやりとりがあり、とりわけ現地の医師とやりとりがあり、その医師と再会できるかどうか、というような具体的な人間関係があって、そういうものを包括したものがあります。それゆえ、「私」は「氷」という日本語の文字を「なつかしい」と思うのでもありますが、その「私」たち一行は、直後、西瓜を買おうとしてしっぺ返しを食らいます。西瓜の売り子が売ろうとしないので、軍曹に仲介してもらいます。売り先が決まっても半分売って欲しいというと、軍曹が痛烈な言葉を媒介します。

「西瓜を切るより、そこにいる日本人の頭を二つに切りたいそうで……」（同）

「われわれが受けた最後の痛撃」と述べるこの部分では、西瓜の売り子が、「圧制者」の日本語をなつかしむ心性への批判を、日本人「圧制者」のことばではなく自分の言葉で言い放ち、しかも「われわれ」には直接話されないことをまで記して、「自分」だけに都合のよい回想を「他人の土地」で行うことの身勝手・傲慢を痛感させていきます。

「いい気になるのは禁物である」と自戒をこめた苦いことば。

「ミンドロ島ふたたび」には、フィリピンの人々との“和解”も、「私」の戦争も戦後も、大団円的には終わらないことが、個別具体的な経緯と思念によってこそ記されていると言えます。

以上、戦後直後の『俘虜記』、二十余年後の「ミンドロ島ふたたび」から駆け足ではありましたが、大岡の、余儀なくされた兵士としての経験とそれを書き記していったことの中から、考えていきました。

それは、回想や確認を含め、戦争、戦場、戦場の死、といったことが、ヒューマニズムや人類愛といった、出来合いの観念では決して語り得ないことであり、そして、まさに個別具体的な中から、そうした自身の思考を綴り考えていったということこそが、アジア・フィリピンから生き延びた大岡の戦後文学だったと言えるのではないかと考えます。

附記

拙著『大岡昇平研究』（平成15年10月、双文社出版）と重なる部分があることをおことわりしておきます。

中川 ありがとうございます。「帝国の孤児たち」という概念規定をしていく中で、戦争体験、兵士になった体験は殊更に重要なファクターとして認識しなければならないと思います。彼らは「帝国」のもっとも積極的な担い手であってここに入りきらないのではないかと、ここに入れること自体がおかしいのではないかと、いろいろのご意見が出てくるかと思いますが、花崎さんのご検討で、まさしく兵士たちが二重性を帯びた存在であったことが出てきました。被害者であり、加害者であるという二重性を持っているわけですが、これは二つに分断して、どちらかに傾けることは不可能であり、その重なりと、時間の経過、歴史の経過の中で、時間が決定づけていく側面もあるかと思っています。

もう一つ外地体験を考える上で、特に「南方」という特殊な地域が出てくるわけですが、西

欧帝国主義の時間の中にあつた東南アジア地域に、日本の帝国主義が二重に侵略していくという構図であるわけです。この中で多くの兵士たちが、今でいうグローバル化、異文化体験をしていく。異文化体験というものは異質なものを発見する旅と言われていますが、その最も究極の体験として大岡昇平が描く作中の兵士に特化して考えてみると、この意識的な自己観察が敵としての他者と同質化する瞬間も描いているわけです。アメリカ兵のバラ色の頬を通して自己との同質性を見てしまう。あるいは同質であると信じきっているものが、異質なものを探していくという分断のあり方が描かれています。これは同質としての友人や戦友、あるいは林京子にも出てくる上海で親しんだ人たちがいつのまにかまったく違ったものに変質していくことに気づく。

昨日、沖縄からの緊急報告をやりましたが、これはウチナンチュウとヤマトンチュウの二つの分断が、日本人という枠の中に押し込められるか、押し込められないかという問題を込めながら、この二分法が問題として生活に生かされている。台湾で言えば、本省人と外省人という二つの分け方、こうした分断、整理のあり方自体の、ある種の概念性、花崎さんがおっしゃった日常性の唾棄が概念化することによって話を整理してしまい、いつのまにか暗黙のうちにシャンシャンと手打ちをしてしまうことなど考えるべき問題でしょう。そこに取り残されていくものは、搾取されたものの被害の実態のみということが起こっているのではないかと思います。

続きまして日比さんお願いいたします。

日比 最近、北米に移民した人たちの日本語文学のことをずっと考えています。それを考えている過程で、空間をどう移動するか、そしてその移動や定着をどう表現するかということに関心を持ちはじめました。今日も私の関心としてはその延長上で、文学の言葉と空間の表現のかかりについて整理しながら、コメントをつける運びにしたいと思います。

文学テキストと空間表現の交差の形にはさまざまなパターンがあります。たとえば文学テキスト内に書き込まれた空間がどうなっているかを論じるというパターンがありますし、それから現実の上海、作家横光と上海、というように現実の空間と文学テキストの関係を考えるパターンもあるかと思います。書き込まれた登場人物としての人間とその身体が、空間とどうかかわるかということも問題になってくるでしょう。外部の空間をその人がどのように知覚するか、管さんの視点の話もそうですが、知覚と表現のあり方の関係性も考察の対象になるでしょう。これまでいろんなバリエーションで考え方、感じ方が論じられてきたわけですが、少しこれからそれを整理してみます。

懐かしいところでいきますと、「構造主義的な構図」があります。著名なところでは「中心」と「周縁」の図式ですね。外から内へ来てまた出て行く「竹取型」、反対に出て行って帰ってくる「浦島型」と分類されたりする。境界は両義的である、と。境界をまたぐ異人の存在や、彼らのもたらす一時的な混乱に注目が集まった。異人が入ってきた時、あるいは出ていく時、秩序が混乱してそれがまた再構築されることによって共同体の秩序が揺らいでのち再強化されるというパターンが言われました。

「共時的な配列と移動」のパターンもあると思います。前田愛さんが書かれた「BERLIN 1888」は、ウンテル・デン・リンデンとクロステル街の間を太田豊太郎が横断していくようす

を論じています。いくつかまたがっている空間を登場人物が移動していく、横断していく、横切っていくという軌跡をたどると同時に、登場人物がどう変化していくか、どう成長するか、しないかということが論じられるパターンです。

それから「通時的」なものもあります。ある空間、上海なら上海、武蔵野なら武蔵野、それが時間によって変化していく。その変容の過程をたどっていくと同時に登場人物がどういうふうに変化するか、成長するか、しないか、人間たちの関係性がどう変わっていくかを論じるというパターンです。

少し違う方向では、バシュラルの空間論では、精神分析的な考え方が導入され、人間に無意識と意識があるように、空間にもそれに対応する「意識を負う空間」「無意識を負う空間」があるという。家の中にも意識を司る部分の書斎、家族との居間などがあり、無意識を司るお風呂場、トイレなどがあり、廊下、階段は境界領域ということになる。街にもこれが拡張されて、意識的な部分と無意識的な部分を司る部分があって、人間の意識と対応しているのだという論がなされることがあります。

近代文学研究でしばしば用いられる発想に、「入れ子型」というものもあります。あまり厳密な使い方はされていないようですが、空間が人間に対応し、人間が空間に対応するという状況を、相互に入れ子型になっているのだというような論じ方をします。どこの出身なのか、階層はどんなものか、国籍はどうか、性別はどうかなどといった登場人物の属性や身体を、空間との対応関係を意識しながら、「入れ子型」という言葉を使いながら説明します。国や故郷や地域が問題になり、そして一方で人間の身体として慣習、振る舞い、衣装、人間の身体の外側の空間である身体との境目である衣装がどうなっているかということが考察されたりするわけです。

これらが70年代後半から出てきた空間論のいくつかのパターンですが、最近はもっといろいろなバリエーションが出てきておりまして、今日、うかがったお二人の発表、花崎さんのコメントも、最近出てきた、より空間論を新しく更新していこうという、いくつかの方向性の中に入れて考えられるのかなというふうに聞いておりました。

一つ目としては、もっと細かく空間は見られるだろう、空間をもっと「モザイク」のように微細に切り分けて見て見ようという動きがあると思います。たとえば空間をジェンダーの配置によってもっと切り分けてみる。階層によって、世代によって、植民地関係によってモザイクのように空間を切り分けて、もっと細かく空間を見ていく。そういう可能性があるだろうと思います。

二つ目としては「輻輳化」というものを考えたい。たとえば身体と空間の接続はこれまで入れ子型などと大ざっぱに言われてしまっていたんですが、接続の具合は必ずしも一重ではないんじゃないかと思うわけです。ジェンダー、階層、世代、植民地関係などの諸関係が、一人の人間のうちにも、他者との関係のうちにも輻輳して折り重なっている。自分の身体と空間との関係の結び方にしても、部屋とのそれ、家とのそれ、仕事場、私的空間、公共空間、故郷、国家——さまざま、かつ多重です。ここも輻輳化しないといけなだろうなと思います。

三つ目は「開放系」という発想。これはいわゆるカオス論などの複雑系の用語を借りているんですが、周囲の環境との間で出たり入ったり繰り返している情報を取り込みながらシステムは自己組織化するという発想です。人間と社会、文化的な活動は当然、開放した系として発想

されるべきものであるはずで。最近、展開している植民地研究やグローバリゼーション研究は人の移動、モノの移動に注目して、それをとらえようとしており、今回の企画もそうなっているわけですね。こうした動きを空間論的に整理してみれば、開放系空間の話としてまとめることもできるだろうな、ということです。劉さんのお話に出てきた、田村俊子も名取もそうですし、人の流れ、流れてくる情報、刊行されて人々の手に渡っていく雑誌、こういうものを開放した空間の中で出入りするものとして見ていくのは、一つの空間論から見た整理と言えるのかなと思います。

四つ目は「多重化」。これは「輻輳化」と近いところもあるのですが、たとえば記憶の問題などを考えるときにこれは有効なのではないか。今回、繰り返し出てきたのが、一つの作品にしても、一つの空間にしても、何重にも意味が重なっているということです。それは、たとえば記憶であるとか、再訪であるとか、人が積み重ねていく営為にしたがって、意味や感情が複雑にぶれながら重層化されていくわけです。それをとらえたい。それがどういうふうに語りの上で載せられていくのかを連関性をとらえたいということがあって、これを立ててみました。

最後は「メンタルスペース論」です。認知科学の言葉なんですけど、世界と知覚する人間との間に、一つの仮説的な「メンタルスペース」という空間を想定することで、よりうまく人々の知覚のようすを説明できるのではないかという議論です。文学に引きつけていうと、ある種の読者論と物語世界論をつなぐ結節点みたいな論を提供するはずで。林京子の『ミッシェルの口紅』中の路地という空間がどのように読者の中で構成されるのかを、作品の表現に即して考えていく取りかかりが、おそらくこの発想の中にはあるのではないかと考えています。

ではここから、簡単にお二人の方に質問をさせていただきたいと思います。

劉さんに。開放的な空間ということに絡めて、『女聲』という雑誌の流通に関することをうかがいたいと思います。『魔都上海』の中で宣教師や中国人の知識人たちによって西洋起源の知識が日本に運ばれていくようすを船便の関係、翻訳の問題を絡めて論じられていて面白く拝読しました。つまり、国境を超えて動いていく動きが、どういう仕組みによって支えられているかということですね。そこで、『女聲』という雑誌に関して、流通、受容の面ではどういう状況にあったのかお聞きしたい。田村俊子が亡くなった時の『女聲』の特集号に内山書店の内山完造が追悼文を寄せている。いま私は北米の日本語書店を調べているんですが、内山書店は北米の日本語書店とはちょっと違って、もう少し積極的に日本政府寄りの機能を自覚的に果たしていたとうかがいましたが、『女聲』の流通にかかわる面で内山書店が何か関連していたのかどうか、ご存じだったら教えていただきたいと思います。

もう一つは、上海の文学者のサークルと俊子の関係について。俊子は、彼らをうまく利用したんだと言われましたが、彼女は中国語ができず、英語で書いたものを翻訳してもらって書いたということですね。しかもサークルの中には共産党の黨員たちが半ば公認なのか、入っていた、と。お互いに利用しあっている、複雑だったのではないかというふうにかがいましたが、はたしてそうした状況を「俊子が」と言ってしまっているのかということを知りたいと思います。

次は管さんに。記憶を書くということに関して、いろんなレベルのものが重なってくる、それがテキストの中でうまく展開されている、そう思って『ミッシェルの口紅』を面白く読みま

した。空間の重層性が、まずは書きこまれている。路地の中にもいくつかの局面があって、上海の中にも、さまざまな租界の様相があって、そこに内地の話、朝鮮の話が出てきて、小説内の空間が重層化しているわけですね。もう一つ、ご指摘されたのは言語の重層化ですね。「居留民語」というのが林京子の中にありましたが、ある種のクレオール言語だと思います。内地のどこの言葉でもなく、中国語でもない言葉が話されていて、それでコミュニケーションをとれるのだけれども、何か違和感を催さずにおかないような言葉になっている。また物語の語りとしても、語り手の視点で限定されてもよいところを別の登場人物に語らせたりする。物語の語り口にも重層的な側面があるわけです。そういったいくつかの重層性が今日、明晰に分析されていて、面白くうかがえました。

そこで一つお聞きしたいのは身体の問題です。身体は、自己と空間をつなぐ一つの媒介として機能するわけで、小説はそのあり方を書きとどめることができます。林京子の作品にはその身体への関心が、たくさん出てくるように思いました。においに対する感覚とか、中国人を切りつけて、怪我をして血が流れる場面。彼女は身体をめぐる感覚に鋭敏な作家なのかなと思ひまして、さきほど挙げましたように、他の要素でこれだけ重層化されているのならば、身体も複雑に重層化しないうるのかなと思ひまして、そのへんでお考えがあったら聞いてみたいというのが私からのコメントです。

中川 今回、連続講座のシリーズでは久しぶりに文学を扱ったわけですが、文学を語ることは難しい時代になってきています。日比さんから、これまでの文学研究そのものを読み直していくためには、どんなことがあるか、簡便に整理してくださいました。ただ今、ご質問にもあったように、それがまた作品自体から生まれているというところが文学研究の複雑なところになると思います。70年代からの文学研究理論の援用、応用、誤用の連続の中で、この30年間過ぎたら、ハッと思うと「文学研究って何のためにやっているの？」と言われちゃうような状況になってきたことに大いに責任を感じています。私どもが今考えているようなことを肉付けしていく作業が必要ですし、いろんなことがこれから要求されてくるような気がします。それは結局、文学と世界観をつないでいくようなものが一体あるのか、ないのかとか、文学的想像力はどういう形を結んでいくのかなど、極めて形而上的な問いかけなのですが、今日、お二人のご発表は、そうした問題に触れていると思います。それでは日比さんの質問に、お二人から答えていただいて、早速に皆さんと討議に入りたいと思います。

劉 流通のことですが、開放系云々でも出てきましたが、帝国のテーマに関して人間の移動は最大の空間性の問題だと思います。それによって言説が生まれたわけですから、周辺にこれだけの人間の移動が発生したのは近代以降の大きな現象であり、この時代の特徴だと思います。

名取のことですが、彼は戦前、ドイツで日本を表現し、日本の昭和期のものを写真でたくさん撮ったわけです。その後、上海に来て、戦時報道をやりましたが、あまり一般向けの写真は撮らなかつた。しかし戦後、もう一度中国に行って、今度はそれを撮ったわけです。そういう移動によってさまざまな写真の上の言説が生まれて我々にテキストを提供してくれたわけです。モノの流通はもう一つの大きなポイントです。この雑誌の流通は回数によって部数が違うので

すが、5,000部とも1万部とも言われています。多分、多い時は1万部、少ない時は5,000部だったと思います。問題は読者層です。男性からの手紙が結構ありまして、販売所も全国規模にあり、男女問わず浸透していた。あの時代、1万部の雑誌はそんなにありませんから、結構、意味を持っているところに影響を与えたのではないかと考えられます。雑誌の流通に関しては当時の状況がわかりにくいので、どこまで真実を語れるかはちょっとわかりませんが。

もう一つの内山書店に関してですが、内山書店の機能は、まさに中国のインテリ、知識人たちに日本の知的資源を運んだ役割を果たした。魯迅の蔵書は7割が日本語の蔵書だったが、その多くは内山書店から仕入れているわけです。当時、上海といわず中国全体のインテリの7割がみんな日本帰り、日本留学の経験者です。彼らの知的資源が日本語だったわけですから、内山書店がその流通において大きな役割を果たしていました。とくに30年代の中国での日本語図書流通においてはとても大きかったと思います。

文学グループをうまく利用していたと申し上げました。互いに利用しあった部分があります。この雑誌を通して発信されたのは大衆に対する啓蒙、現実に対するさまざまな進言であったわけです。これは共産党が自分の解放区でやりたかったことで、その場を日本人がつくってくれたのですから、実にありがたい話なんですね。上海の人口構成を見ますと、女工が女性人口の7割も占めていて、日本などの紡績工場がたくさん進出していたので、とりわけ女工が多かったわけです。女工を辞めて娼婦に流れてしまうこともよくあって、その女工たちの啓蒙については、共産党も、労働運動や地下工作などを通してさかんにやっていました。横光利一の『上海』の「芳秋蘭」はその典型です。女工の啓蒙運動を行うのは共産党の一貫した政策で、日本人の田村俊子がやってくれたことは、まさにその目的に合致していたわけです。もちろん日本軍がそのバックにあるというのは非常に奇妙な現象と言えるのですが…。

菅 身体の重なりというご質問ですが、わかりませんというのが正直な答えなんです。『ミッシェルの口紅』については考え中です。むしろ『上海』という作品に見られるのではないかと思います。『上海』では中国に降り立って、空気のおい、水、川、身体感覚によって過去の身体の体験が呼び起こされて、しかし現在の自分の身体が重なっている。『上海』ではあくまでも現在の視点です。それが記憶を書く、語ることに成功している一つの方法だと思えますが、『上海』の語りにそれが見られるのではないかと。花崎さんが言われた大岡昇平が具体的に見たもの、感覚だけが記憶を語りうるということと、それは結びついているのではないかと思います。

日比 彼女は8月9日の時点を出発点として書いている。被爆者ですね。被爆した自分、傷つけられてしまった、後遺症が残っている自分から始めないといけないとしたら、現在の自分の傷つけられた身体と、無垢だったかもしれない少女の頃の身体のレベルでも、重なるのかなと読んだんですが。そのように想像したものですから。

菅 そこには多少、躊躇を感じる部分がありまして、被爆したということによって、それが、少女の頃の無垢性を憧れるとか、理想化する、加工化していくというのも、ちょっと危険な感

じもするんですね。しかし林京子自身が述べているように、彼女自身、そういう語りの地点に立っている。それが『上海』にしる『ミッシェルの口紅』にしる、どのような言語に言語化されているか。その意味では『ミッシェルの口紅』は禁欲的になっている、そういう自分を出すことに禁欲的になっている作品だとは思いますが。今後の課題にさせていただきます。

中川 それでは聴衆の皆さまからご質問、ご意見等々があるかと思いますが。

崎山 お二人の互いの発表のかかわりあいというか、ずれのあたりを聞かせていただきたいと思いますが、日比さんのおっしゃる空間をめぐる話で。劉先生の「上海という無国籍のトポスにおいてこそ」という「無国籍」という言葉、帝国日本の圧力もあり、中国の中でのさまざまな力もありという、パイアスがかった無国籍ですが、その無国籍のありようが、生きられた場所、社会空間、状況と、管さんが話された、林京子の作品の中の「上海の路地」など、互いに組み合わせることができないようなジグソーパズルのかけらを、むりやり一つの枠組みにはめ込んだような無国籍とは言えないような条件、多国籍とも言えないモザイクという、同じような平等なカケラが互いに合わさっているというとも言えない、重なりあいをしているような空間だと感じとれたわけです。

「無国籍というトポスのあり方」と、管さんの「重なりあってしまうような緊張度とコンフリクトに満ちたやりとりがある場所」が、どのようなつながり、断絶をもっているのかということ、お二人から教えていただけたらと思います。

劉 「無国籍」というのは言葉足らずかもしれませんが。つまり上海は基本的には移民社会で、ここ200年くらいでできた町なんですね。その場所に、中国国内から戦争のたびに移民が入ってくる。難民がやってくる。また世界中からいろんな形で避難者が入ってくる。冒険者もやってくる。いわば幾重にも重なっているわけです。そこには、ある意味では一種の根無し草的なものが形成され、一つの表層をなしていたと思います。そしてみんながみんな根無し草であるがゆえに、もう一つの求心力、つまりふるさとを求める力が逆に生まれて、その両方の力学が常に一つの揺らぎをつくり出している。相手がある時は許してしまう部分と、ある時は拒否してしまう部分と、その二つの力が常に「上海」という場所に重なっていたわけです。上海に対して解放感を感じる一方、拒否感も感じる。内部の生活者同士にもこの力学は働いていたと思います。娼婦の存在にしる、路地の存在にしる、おっしゃる通りで、一つの空間に収斂させられていて、そこでの共同体意識と、そこから脱出したい、そこには自分の居場所がないという意識が、つねに同時に発生するわけです。俊子だって意識的にチャイナ服を着て、身体的に言うところ中国社会に入ろうとする一方、日本人が来るときには逆に和服を着てそれを迎えたりするという繰り返しをやっていました。僕にいわせるとそれが、「演技する」側面、両方の力学を意図的に利用する側面さえあって、彼女の中では、どこかでそれを自覚し、その揺れを、あえて選択していたように感じられます。

菅 林京子の『ミッシェルの口紅』を読みますと、たとえば『言語都市上海』とかの本が出ていますが、さまざまな上海をめぐるものを見た時のような「多国籍」「無国籍」、流動的空間の広がり、逆に感じられないと思ったんですね。「路地」という空間が無国籍とか多国籍とかとつながらなかったんですが、常に「私」の位置が路地の中にあって、大橋先生が「子ども部屋からの視点」という形で論じておられたと思いますが、彼女は確かに越境して外に出ていくんですが、また戻ってくる、路地の中に。中からの視点であって、外から路地を眺める視点は無いんですね。それが上海をめぐる展開される「上海言説」と、ちょっと異質なものになっているのではないかと思います。

劉 補足させていただきますと、上海の路地には特徴がありまして、長屋を横に並べるような、一つの路地に入れば出られない構造が多いのです。つまり路地の逆サイドはオープンの場合もあるが、行き止まりの場合もあるわけです。その路地一つひとつが単位として成立しているのですから、そこは一つの共同体であると同時に異質的なものが一箇所に閉じ込められた空間でもあるわけです。その空間の特殊性が、ひょっとしたら林京子の一心象風景になった部分ではないかと私は話を伺って想像しています。

大橋 劉さんに。事実確認ですが、『女聲』の創刊は1942年5月ですね。ミリントン・プレスの接收後ということですから。質問ですが、『女聲』という雑誌が良妻賢母、銃後の女性などを批判し、自立した新女性を送り続けるという役割を果たしたというところに劉さんの力点がおかれていたと思いますが、タイトルの自己実現を全うした養女という言葉を借りて質問させていただきますと、この時期の「上海」を題材にしたさまざまな作品を読んでいると「自己実現を全うした」と本人は実感しているつつも、周囲からは「正体不明の女」とでも言えばいいのか、そういう形で見られている女性たちがすごく出てくるような気がします。『上海の蛍』に登場してくる東方文化協会に出入りしている作家のE君とつきあっている女性が東亜同文書院大学の博士夫人の目から見ると「非常にうさん臭い女だ」と見られていたり、堀田善衛の『祖国喪失』に登場してくる君子という女性が、フランス租界の奥で幼少期を過ごしているがゆえに日本人社会には入りきれないでいるとか。今は日本人の例を出したけど、今度は逆に上海で、かなり彼女の作品が流通し始めていた帳愛麗の小説の中の『白い薔薇、赤い薔薇』のタイトルの意味自体が、純種を生んでいく家庭にいる夫人に対置する赤い薔薇としての女性が登場してきたりする。そのようなカテゴリーが、先生の今日の良妻賢母ではない、女工を啓蒙するような形で自立した新女性を育てあげべく、田村俊子がつくりあげた『女聲』という雑誌からは、すごく、こぼれ落ちているのかな、どうか、すくいあげる読みの提示は、どうなるのか伺ってみたいと思いますが、いかがですか。

劉 じゃ、お答えします。つまりそのへんの回想録の中に出てくる彼女のイメージは悪いんですね。どれを読んでも、よくない。それについて周りどんな人間関係にあったのかは調べてないのですが、あえてこのタイトルにしたのは、2、3つのことから推定して決めたのです。一つは分量、彼女は毎回、返信を書いているわけですが、それには相当な労力が費やされ

ています。中国人の手紙を中国人に英語に訳してもらって、それを英語で読んで、英語で返事を書いて、もう一度訳してもらって、雑誌に載せる。この作業をあれだけの分量で1カ月の間に繰り返しています。もちろん全体の編集、どの原稿を採用するかも関露と相談しながらやっている。これだけの情熱をかける対象を、彼女は見つけたわけです。中身を見ても、そこにはまさにカナダ時代以来、彼女がやりたかったものが凝縮されています。亡くなった後、陶晶孫が部屋を片づけに行ったが、その部屋はとても質素で、何もなかったらしいです。心身のすべてを『女聲』に注いだのは、まさに一文学者としての最後の生き甲斐を全部これに賭けたのだなと感じます。本人がどこまで自覚していたのかはともかくとして、ここに彼女の自己実現が大いにあったのではないかと、今から評価すれば、そういうふうに言いたいわけです。

もう一つ、このへんは彼女自身も気づいていたらしいが、死に場所を上海に選んだことです。内山完造の妻に頼んで、自分のお墓の土地を確保してもらったのです。自分が上海に骨を埋める覚悟でいたのは、この最後の5年半で彼女の作家人生から見れば一つの使命、自己実現を全うしたからではないかと、私は判断したわけです。お墓に関しては内山の回想の中にも出てきますが、どうやら彼女はそれを強く望んでいたらしいです。

鳥木 田村俊子の上海での創作活動が戦後、日本においても周縁化されていったということですが、周縁化される過程に、性格的な問題等もあると思いますが、政治的な力学も働いたのかなと思います。教えていただければと思います。

劉 単純です。俊子のいろんな言説、メッセージにはちょっと内地批判的な部分もありますが、当時の時局の全体の言説に沿った発言もけっこう多いのです。中国での「皇軍」の行動を肯定し、大同や張家口に行って「日本軍はそれを制圧してよかった」とか、「平和が戻ってよかった」とかというような言説が、かなり入っています。戦後、小田切さんが編集したと思いますが、そのへんを彼女のために抹消したのかも知れませんが、彼女の作家人生から見れば、ちょっと汚点に見える部分なので、それで消したのだと、あえて載せなかったのだと思います。しかしよく読みますと、全然違うメッセージもその中に入っていて、民衆に対する関心、平和を素朴に愛し、求める一面も随所にあるので、本当はそのまま出してほしかったのだけれど、なぜか抹消されて、作品集には載っていません。

黒田 大変刺激的なお話とコメント、質疑応答も含めていただきました。今回の特集のタイトルでもある「上海の養女たち」という概念が、血族の関係をまた一つ対照的なものとして置いて形成されることを考える時、上海の土地の「養女」としての田村俊子、林京子が位置づけられることの危険性については、どのようにお考えでしょうか。日本近代文学会のシンポジウムで各国の近代文学で台湾、朝鮮、沖縄の問題が扱った場合、「帝国の養子」である、きょうだいであるが、養子であるという血統主義を相対化する力が、養女には働いたと、養女といういい方は養子と似ていながら、危険なのは、「上海の養女」「上海の養子」と言うと、残留孤児が想起されるような、国籍、国境にとらえたものとして存在されてしまうことがあるかと思います。ご発表の中で個別具体的に、管先生が、娼婦の形象を採り上げて母子関係の中に幻想の中に亀

裂を入れていく形象をおさえられた。個人的に横光、堀田とかを研究する中でとらえたものと合致しまして刺激を受けました。そういう問題は「養女」というとらえ方の生産性か、危険性かについてお考えを伺いたいと思います。

中川 その危険性を認識したうえで、今年の春の日本近代文学会で、シンポジウムとして東アジアをめぐるものが開催されました。韓国、台湾、そして沖縄からのパネラーという形でしたが、私は途中からものすごく腹が立ってきました。東アジアをめぐるという題されたシンポに沖縄の新城郁夫さんを招いたわけですが、今上天皇の琉歌作成という沖縄の「文学化」によってどのようなものが隠ぺいされてしまうかを指摘されました。ところが台湾からの方が「台湾もフィリピンも『南方』も、皆、日本の養子だから」というような発言をされるわけです。つまり沖縄というトポスを他者化したあげくに、「日本の養子」にしてしまうという文脈が出来てきてしまうことに慄然としました。もちろん、台湾の方も他意があって発言したわけではなく自身の発表の流れに即した形での発言ですが、このシンポ自体の安易な作りがこのような「能天気」ともいえる文脈を精製してしまったことは考えなければならないと思います。

このことを「養女」という言葉を使ってみると、どのような転倒が起きてくるか考えてみましょう。先ずジェンダーの問題が関わりますね。「養女」と呼ぶことで何が違ってくるのでしょうか？勿論「帝国」の押しつけの危険性があります。しかしお二人の発表で展開された親近性、言い換えればインティマシー、親密圏というようなものの発生の問題をどう考えていけばいいかということが浮上してきます。絶対、そのことと関与していると思います。林京子の場合は子どもの頃ですから絶対的な他者、敵対する外国人侵略者にはなりえない。胡同の奥で営まれる中国人との共棲が日常空間ですから、ここで日本人だけ分離して暮らせるものでもない。そういう錯綜性を、否定的な意味ではなく、ある種の危険性をも含めた言葉として表現するものとして「養女」という言葉があるのではないかと考えます。

「養女」という言葉は、西さんがまず話をされて、僕は、なるほどと思ったわけです。なぜなるほどかといいますと、亡命とか流離、移動とかという言葉について、例えば20世紀は移動の時代だとか言って自明的となっているものを波立たせていくような言葉がないか考えた時西さんが出された「帝国の養女たち」という言葉はそれを遂行する言葉のように思いました。もちろん両義的な側面があって、肯定的にも捉えられると同時に、何かイライラさせる感じもあるわけで、そうした感じが出てきたとしたら成功だと思っています。そうですね、むしろイライラしてほしい。東アジアという言葉を出したとたん、韓国と台湾と沖縄から人を呼んで何となく東アジア文化圏の「国際会議」ができるみたいなことにはしたくなかったというのが本音としてあります。

そうした意識を、パネラー、コメンテーターの皆さんに押しつけてしまったわけですが、これほど解明していただいて感謝しています。養女、養子という疑似家族制という一つの国家を家族形態になぞらえていくことが、小説という空間の中でどのように描かれていくか、あるいはそれらが作品の中に反映しているのか、描かれることによって私たちの想像力が、どのような形で認識を得るのかといふことが、おそらく次の課題として出てくるのだと思います。その意味においても過渡的な言葉だと思いますが、大事な言葉として感じているのですが。

劉 僕もこの題をいただいた時、どうしようかなと思ったのですが、よく考えられた題目で「養女」こそがミソだなとも思いました。血縁を持つ共同体から出され、もう一つの虚構の共同体に入って行く、これがつまり養女の立場、位置ではないかと思います。そこに大きなアイデンティティの揺れが発生するわけですが、その揺れによって表現されたものにこそ、我々が作家の内面に潜んであるさまざまな危ういもの、微妙なもの、繊細なものを感じることができるのではないかと私は理解して今日の発表をさせていただきました。

菅 私は、もっと素朴なレベルで考えまして、林京子という人を考えた時、上海に養女に出されたのか。いや、上海から養女に出されたのではないか。しかし国籍が侵略国である限り、彼女は上海の娘なんだけど「日本に養女に出されたのよ」と言説を発することが、すでにできない。これが「懐かしさを語ることの困難」と言いましたが、被爆の問題とは別のところで、もう一つの女性作家林京子を考える時の一つ視点になるんじゃないかと感じます。

花崎 劉さんのお話で、上海に渡って『女聲』の編集をして、投書に対してこれだけ丁寧に回答し深くかかわっていく、その分量、ここに懸けてしまっていくわけですね。懸けながら自分の何かを創作していくのではなく、投書に答えることで、自分が書いていくことを見定めていく。それがいわば「自己」実現を全うした養女ということになっていくとするとどうか。それが日本ではできなかったことで、“下位におかれていた”上海でしかできなかった、でもそこでやっぴいこうと定めて、その決意が『女聲』に出ているのだと、痛いほど伝わってきました。しかも上海でしかできなかった、という、可能性の一方の断念の下には、“下位におかれていた”上海の人々がいるということ。そういった多層的に重なりあった状況や思惑といったことを考えました。決して単純には考えられないこと、改めて認識しています。

菅さんのお話で、記憶の問題について大変興味深く伺いました。やはり簡単にはいかないと感じています。すなわち記憶し想起するというのは、その時のことを思い出してもその時点に立つことはできないわけで、常に、想起する時点で整合的なことしか考えられないわけです。その場所にいわば二重に立っているような。「ミンドロ島ふたたび」でも「われわれ」ということばが、戦後二十余年の今、編集者と共に来ているわけですが、「われわれが守備していた」といった過去の僚友とのことと、たった百字くらいしか離れていないところで二十余年後の今「われわれは鋸山に向っている」という記述が重ねられていく。しかも別のところでは、自分たちの「われわれ」とは異なるフィリピン人二世の「われわれ」の問題が問われていく。林京子の問題から、そうした記憶を語ること、それを検討することの難しさや、ほぐしていくことの困難さ、しかしそうした重層性のなかからしか、なにものかは探り得ないのだということを考えました。

ありがとうございます。

日比 確かに「上海の養女たち」だとカッコいいんですが、「上海の養子たち」ではカッコよくないんですね。なんでなんですかね。言葉の単なる語感の問題ではなく、意味内容の広がりや問題なのかなと思います。「養女」というのを中川さんはインティマシー、親密圏と言われた

んですが、養女たちは愛憎入り交じるものを感じて複雑な思い出と愛と、身を引き離すということであって。養子は何なんですかね。もうちょっと制度的なものであって、締めつけるものであって。比喻として両方の言葉を置き換えて考えてみると、そこで起こっていること自体に対して光を投げかけるものがあるのかなと思いつつ、考えていましたが、結論はここでは出ません。

中川 養女問題はこれから持続して考えていきたいと思っています。「養女」になったら何かしらいいこともあるのですが、実はものすごく不幸な養女もおりますので、その問題も考え続けていきたいと思っています。こんな充実したシンポジウムを持つことができました、二人のご講演者、二人のコメンテーターの方々に感謝申し上げます。もう一度拍手をお送りしたいと思います。皆様、どうもありがとうございました。これにて終わりたいと思います。